

四 ショートランド島（西南台前期）

その頃私は目を傷めていた。名誉な負傷ではない。

長大な海岸線は防衛上隙間だらけであり、敵のスパイが小舟で潜入しようとするばいくらでも出来る。上陸の際の先行潜入の危惧に対して、或いは島内ゲリラ戦になった場合の不意打に備えても、人が通った時の自動警報装置が欲しい。綱に空罐をぶら下げたような物では音が小さくて役には立たぬので、小銃弾の雷管を利用出来ぬものかと考えて、小銃弾の解体をしているうちに暴発して左目を負傷してしまったのである。

私は眼帯をしたまま、不自由な身で本部要員約三十名を引率して、西の方へ海岸沿いに進んで行ったが容易なことではなかった。敵機が現れるのに備えて、何時でもジャングルに飛び込む事が出来るように、海岸とジャングルの接撃部を荷物を担いで行くのだから遅々として進まない。

それに川がやたらと多い。小島ではあるが、毎日スコールが降り雨量が多いのである。

それでも幅の狭い川は、ジャングル内の倒木の上を渡るなどして時間はかかるがさしたる困難も無しに渡河出来たが、ワニ川と言う幅七十メートル程の水量の多い河の手前まできて戸惑ってしまった。身体だけなら容易に泳いで渡ることも出来るが、かなりの荷物を持っている。思案の末、再び梱包を解き、荷物を小分けにして乾パンの空罐約十個に入れ、それを押して渡ることを繰り返した。私も裸になって泳ぎ渡ったが、しんとしたジャングルの中、名前もワニ川と言いつても河底から何が現れて来るかも判らぬ不気味さがあった。眼帯は何時の間にか捨て去られていた。漸く渡河し終わった頃には夕日が沈みかけていた。未だこれから先どの位の時間がかかるのか見当もつかず、気ばかり焦るがどうにもならない。

只、薄暗くなって敵機の心配は少なくなったので砂浜の上を急ぐことが出来た。

もうそろそろ西南台へ行くジャングルの入口がある頃だと思ふが鬱蒼たるジャングルの何処にそれがあるのか判り難い。不安な気持ちで進むうちに前方に小さな火が見えた。あまり遅いので先発した下士官の一人がジャングルの入口で我々を案内する為に待っていてくれたのであった。救われた思いで後に従ったが、夜のジャングル内は又大変であった。

ようやく西南台に辿り着いたのは夜もかなり更けてからであり、疲れと空腹の為に兵達は口もきけぬ有様だった。

とりあえず大隊長に報告に行ったが、こっぴどく叱られた。聞けば大隊長等は、舟に乗って一時間で来たらしく、陸路の厳しさが判らないようである。

綿のようにくたくたに疲れ切って、しかも常に敵襲の不安を感じながら、未知のジャングル内で眠りに落ちた。

夜が明けたが深いジャングルの中では日の光が無い。

気温も低く、昼の猛暑からは想像も出来ない。

点呼が終わると兵達は食事の準備にとりかかった。食事といっても、甘蔗の葉っぱの煮汁の中に綿のような椰子の実を千切って浮かし、時には甘蔗の屑がまじっている貧弱さである。

いくら疲れていても食事となると生き生きと働く兵達の様子を見ると、酷い状況になったものだと思感せざるを得なかった。

西南台に移動してから暫くは銃爆撃も無く、嘘のように静かになった。

あの猛烈な艦砲射撃や銃爆撃にはどんな意図があったのであろうかとよく話合った。近日中の上陸攻撃の為に防衛陣地を破壊しに来たのか、或いは本当は他所を攻撃するのであるがその企図を秘匿する為にショートランド島を艦砲射撃した陽動作戦であったのか判然としない。

とにかく静かであったが、緊張を緩める訳にはいかない。

海軍から重大な情報が届いた。

マッカーサー大將麾下の南太平洋艦隊に、アッツ島攻略以来余力が出来たミニッツ大將率いる北太平洋艦隊も協力してソロモン全域を攻略する為、現在ガダルカナル島のルンガ泊地に艦船が集まり始めており、近日中に一大攻撃体制を整えていよいよショートランド島に來襲する氣配が濃厚だと言う。

勿論日本側も手を拱いているわけではなかった。

十八年九月三十日、御前會議が開かれ、東条首相以下各大臣、陸軍參謀總長、海軍軍令部總長、樞密院議長が列席して、今後の戦争指導方策が決定されて、その方策に基づき陸海軍協力して、ソロモンを死守することになった。

そして陸軍では、中支戦線の師団をブーゲンビル島に増援させることにし、海軍はトラック島、ラバール、ニューギニアに分散している艦隊、航空機をこの方面に向けて集中迎撃させることになったのである。

こうしてガダルカナル戦争奪戦以来、太平洋戦争最大の激戦がショートランド島ブーゲンビル島周辺に於いて行われることは必至の状況になっている。日・米双方はこの戦いが今次戦争勝敗の分かれ目であると考えて出来る限りの準備を尽くしている最中であり、何時戦端が開かれるか、既に時間の問題になっていたのである。

十月下旬になって、遂に敵の一部がショートランド島に向かって行動を開始した。

しかし直ちにショートランド島本島に來襲せず、二十七日、駆逐艦数隻でショートランド島のすぐ前にあるモノ島を攻撃、上陸し、海軍が置いていた監視部隊を全滅させてしまった。

上陸は島の向こう側で行われたので、戦闘の状況は判らない。監視部隊から海軍基地に対して最初「敵艦隊出現、上陸の兆あり」と言う無電が入り、つづいて「敵上陸開始、我応戦中——」と言う報告の途中で無電が途切れてしまったらしい。

モノ島とショートランド島とは双眼鏡で觀察出来る距離である。我々が夜間、舟艇のエンジン

を始動しただけでもモノ島の上陸軍は敏感に反応して探照灯を照射してきた。

モノ島への上陸目的は、近日中にショートランド島を攻略する為の前進基地確保であるに違いないと考えられた。

その日以来、各隊は昼夜を分かたず海岸陣地に着いたままになった。

大隊本部もジャングルの巨木の上に監視所を設置すると共に、例の西南台への入口付近の海岸に掩蓋を組み、機関銃、擲弾筒等の陣地を構築して日夜敵の来襲に備えていた。

十月三十一日、遂に、七十隻余りの敵の大艦船団がガダルカナル島ルンガ泊地を出撃し、北上しつつあると云う情報が海軍の偵察機によってもたらされた。

大隊長は副官と共に、西南台に在って各中隊の指揮に当たり、私は二十名程の兵を連れて海岸の陣地で敵を迎え撃つこととなった。火器はといえば、各兵携行の小銃と軽機関銃一及び擲弾筒数丁だけである。これらで、敵の上陸用舟艇が射程距離内に入ってくる所を一斉射撃をして戦う予定である。我々の陣地正面だけにでも何百、何千の敵兵が上陸して来るか判らない。たったの二十名では瞬時にして全滅するおそれが大ではあるが、一兵でもその上陸を防ぎ度いと言う悲壮な、しかし確固たる決意を固めていた。

三十一日夜に入って、私は掩蓋を出て空を仰いだ。満天の星空、南十字星が美しい。

椰子の葉風と前方リーフに碎ける波音が爽やかである。そして、その海の彼方何千キロの所に懐かしい祖国がある。

美しい。

やがて夜明けと共に展開される修羅場に立って、何と美しい夜だなと思った。

一睡もせぬ夜が明けて月が替わり、十一月一日となった。

ふと、疲れた目の故か、海上の霞みの故か、島の遙か西南の方角に薄黒い塊が漂っているように見えた。

私は一瞬、緊張して、凝視した。そして全員に警告を発した。

「敵艦来襲！」

兵達は、未だ未だ遠方の艦隊であるにかかわらず、目の敵兵を迎え撃つように緊張して銃座に就いた。

やがて大艦船群は、言語を絶するその暴力の塊は、徐々にその姿を鮮明にし始めたのである。艦隊は既にショートランド島が射程距離に入る迄近寄って来た。

我々は次に起こるであろう状況を覚悟して極度の緊張感にとらわれていた。刻、一刻、敵は近づく。

瞬きもせず敵艦隊の動きを追ってゆく。

が、次第に不審を感じ始めてきた。

一向に艦砲射撃を開始しない。それに、通常上陸の際現れる敵航空機の姿が無い。

大艦隊群はその横腹を見せたまま、ショートランド島の西海岸の沖合を、北へ北へと進んで行くではないか。

「あつ、敵はブーゲンビル島に上陸だ！」

西南台には監視所があるので、大隊長は一部始終の状況を確認しているとは思ったが、念の爲見た儘の状況をメモにして伝令に持たせ報告した。

私も兵達も皆、掩蓋を出て遠ざかって行く敵を茫然と見送っていたが、身体が小震えたまま力が抜けて行くようであった。

その頃になって友軍機の編隊が高空から現れ、急降下して敵艦船群に突っ込んで行くのが望見された。艦隊からは猛烈な対空射撃があり、艦隊の上空は弾幕で薄暗くなっている。

やがて敵戦闘機の大編隊も現れて空中戦となり、敵か味方か判然としないが、数多くの航空機が火を吹いてソロモンの海に墜落してゆくのが見える。

激しい空海の戦闘を繰り返しながら、敵艦隊は我々の視野から去って行った。

敵はブーゲンビル島の、それも迎撃準備を整えていたブインではなく、予想もしていなかった南海岸のタロキナ岬に、なんら陸上の抵抗を受ける事も無くその大部隊を揚陸したのであった。

ブーゲンビル島は九州程の大きさの島で東西に細長い。そして四千メートル級の火山が聳える山脈が東西に縦断しており、島を北海岸地帯と南海岸地帯とに分けている。

もともと密林に覆われた未開の島であるが、それでも北海岸地帯は、所々砂浜も開けており、僅かながら道も通じている。しかし南海岸地帯は、海辺までジャングルが迫り、大部分が湿地帯である。

その南海岸の中央にあるタロキナも、大部隊の上陸、膨大な資材の揚陸運搬は不可能であると判断していたので、日本軍は其処に僅か一ヶ小隊の監視部隊を置いていただけであった。

敵は常套戦術で、この一ヶ小隊に対しても爆撃艦砲射撃の後に多数の舟艇を揃えて襲いかかり忽ちのうちに全滅させてしまった。

日本軍は、先に、御前会議の方策に基づいて、陸海軍協力し、ソロモン死守の準備をしていたのであるが、予想外の地点に上陸してきたので、迎撃作戦に著しい齟齬が生じてしまった。

それでも海軍は寄せ集めた艦隊、航空機を出動させ、上陸前後五次にわたって猛攻撃を加えて敵に大きな損害を与えたが、陸軍の対応が全く遅れてしまったのである。

陸軍は陸路の攻撃が不可能であるので、やむをえず海から小部隊を夜陰に乗じて逆上陸させ、敵の部隊、施設に爆薬を仕掛ける攻撃を反復実施した。この帰路の見込みが全く無い特攻攻撃も第一回目は成果を挙げたが、二回目以降は敵の厳しい警戒の為全滅を繰り返すばかりであった。

そのうち海軍も、敵に損害を与えたものの次第に消耗し、約四百機の航空機の半数以上を失うに至り、今後の本土防衛上にも支障が生じるので後方へ引き上げざるを得ない有様となった。事態は深刻であった。

陸軍の上陸軍迎撃計画は全く狂ってしまった。

上陸軍に対する攻撃は水際攻撃が最も戦果が大きく、やむなく上陸を許しても時を置かず攻撃をするのが望ましい。敵の飛行場建設・陣地構築が未だ進まない時期に攻撃をするのが効果的であるの言う迄もない。しかしタロキナの上陸軍には手の打ち様がなかった。

ブーゲンビル島全島に分散配置してしまった装備不十分な日本軍を集めて急に大攻撃部隊を編成する事は困難であり、且つその進撃道路の建設から始めなければならぬ有様だからである。また敵の情報入手が極めて困難であった。広大なジャングルと峨々として聳え立つ長大な山脈の彼方に如何程の敵が、どのような陣地を構築しつつあるか察知し様がなかった。

その間に敵は、上陸後僅か一週間で椰子林をブルドーザーで切り払い、豊富な資材で忽ちの中に飛行場と堅固な陣地を作り上げていた。そして其処を基地として連日数百機の爆撃機・戦闘機が飛び立ち、ラバル地区・ニューギニア地区を徹底的に銃爆撃を行い、此の地域の空海を完全に制圧した上でいよいよ日本本土の方向へ北上して行く勢いを見せ始めるにいたっていた。

ギルバート諸島・マーシャル群島からマリアナ方面へ突っ込み、その方面の島々の守備隊が次々と壮烈な戦闘の後玉碎していった。

為す術も無かったソロモン守備第十七軍も、三ヶ月程して漸く、反攻部隊を編成し、道路を作り密林中の戦闘・攻撃築城・対戦車戦闘などに就いての訓練を行い、体制が整ってきた。軍司令官の百武中將はガダルカナル以来兵力小出しの失敗経験から、反攻部隊は精鋭第六師団を中軸として、それに中国から転戦の第十七師団第十七歩兵団その他を加えて一大攻撃部隊を編成した。しかし如何せん補給の途絶えた状況下、その装備は僅かな砲門の他は、戦車や海空からの支援は望む可くも無く、只頼りになるのは一死奉公の赤誠に燃えた将兵の肉弾のみであった。また、ジャングルを踏破しての敵情偵察は遅々として進まず、偵察機による航空写真があるだけだった。

しかし迎撃に失敗して以来屈辱に耐えて準備してきた攻撃部隊の意気は天を突くものがあつた。

第八方面軍軍司令官今村大將は命令を發した。「必死敢闘、一人十殺。斷固としてタロキナの敵を撃滅せよ」勝利か死、まさに十万の全軍が玉砕しようとする意気込みであった。

南海第四守備隊の一部もこの攻撃に参加したが、私自身は加わらなかったのでその凄惨な状況は体験していない。しかし戦線からの報告や戦史を総合すると次のようである。

十九年三月八日午前四時四十五分、総攻撃のひふたは砲兵隊によって切られた。

延々何百キロの酷暑のジャングル内を運びこみ、タロキナ敵陣地後方山上のジャングルの切れ間に密かに覗かせた砲列が一斉に火をふいた。

命運を賭けた砲兵部隊が発射した砲弾は正確に目標を襲った。吸い込まれるように敵の飛行場に命中し敵機が次々と真っ赤な炎に包まれて炎上する。同時に歩兵部隊が一斉に攻撃を開始する。

先ず第六師団三個連隊が轡を並べて突入し、中国戦線での常勝戦法により、ソロモンに於ける初めて有利な戦況が展開するかに見え、士気はいやがうえにも上った。

が、有利に見えたのは、そこまでであった。

間もなく敵は待ち受けていたかのように、猛烈な火力で応酬してくると共に戦車群を繰り出し、停泊中の艦隊からは激しい艦砲射撃を放ってきた。

夥しい犠牲を補うために次々と予備隊を注ぎ込み、三次にわたって突撃を敢行したが、累々たる屍を積むだけで敵陣地に近寄ることも出来ない。

十八日夜、遂に後退し、ジャングル内に潜んで再度攻撃のために軍の立て直しを計ろうとしたが敵はさらに密林の中へ言語に絶する猛反撃を加えてきた。緒戦の海兵隊に替わって陸軍二万の敵が反撃を開始し、重砲四十八門・野砲八十門・迫撃砲二百門・戦車五十輛の砲門が火を吹くと共に、さらに海上停泊中の巡洋艦、駆逐艦からは艦砲射撃が連続した。密林とは言え何の掩護にもならず一メートル四方一発の砲弾の為に後退した部隊も殆ど全滅してしまった。それでもなお生き残った

小部隊が今はこれまでとジャングルの切れ目から躍り出して行くそのけしつぶ程の日本兵に対してさえ、またしてもタロキナの陸と海的全砲門が集中砲火を浴びせるかける。耳を聳する炸裂音、もうもうたる白煙・黒煙、そしてそれが消えた後にはもはや一人の日本兵の影もない。万一未だ生き残っている者があればと言う二段がまえとして、敵は歩兵部隊を満載した多数のトラックと戦車群を待機させているが、それも殆ど出動する必要は無い。

も早や戦闘ではなく、一方的殺人である。

あれ程の決意で全軍を挙げて決行した攻撃であつたが、大物量に対しては何の戦果も挙げ得ず、いたずらに消耗し全滅を待つのみであつた。

遂に、方面軍司令官今村大將も、既に如何とも為し難い、今後は密林内のゲリラとなつて切込み夜襲戦法を採るほかなしと決意し、総攻撃中止の命令を発するに至つたのである。

さらに、攻撃中止後密林内戦場にバラバラと生き永らえた兵は悲惨だった。

降りしきるスコールの中で、骨と皮だけになつた兵が、受けた傷の痛みに呻きながら、木の芽・みみず・とかげ・あり・くもなどを食つて息をつないでいたが、それもかなわずとなると、小銃の銃口を頭にあてて足の親指で引き金をひいたり、手榴弾で自爆する、その自爆音が密林の奥深くにボンボンと訝した。

昭和十八年十二月以降、戦線が後方へ移つてしまつてから、ショートランド島の我々南海第四守備隊は実に奇妙な部隊となつてしまつた。

元来ギルバート諸島へ行く可く編成された部隊であるがギルバートへ行つておれば十八年十一月米軍大部隊の来襲によつて玉碎してしまつてゐる筈である。命令の変更の為にショートランド島に来てみれば、真前の島までは敵上陸軍の猛攻撃に遭つて占領せられ、そして今、後の島で死闘が繰り返されている。

命冥加のある部隊に違いなかった。

その上、敵の矛先が後方へ移った直後、十九年の正月を前にして、兵員を歓喜させる贈り物が入った。日本内地は勿論、後方部隊との連絡さえ途絶している状況であるので、我々の欲しい物は何一つ得られる筈がない。ところが長い間、口にすることも無い本物の食料品がどんどん海岸に流れ着いて来たのである。タロキナ攻撃の敵艦船がショートランド島の西海岸を通過する時、兵員や資材を乗せた数隻の敵輸送船が、日本の航空機によって撃沈され、多くの食料品梱包が潮の流れに乗ってショートランド島に押し寄せて来たのである。中味はビスケット・コーヒー・角砂糖等を罐詰にした携帯食料や、牛豚肉類などであった。

ショートランド島は敵の上陸目標から外され、食料品の上陸目標となったのである。

それに今迄は少しでも炊煙を上げると忽ち銃爆撃を受けたが、もう真昼間、椰子の生乾きの葉でもうもうと煙を上げながらドラム罐の風呂を沸かしても、上空を往来する敵機は見向きもしない。

昭和十九年、我々は、敵からさえその存在を無視され、軍隊の孤児になっていた。

そして敵弾の脅威が無くなったので現地自活に専念出来るようになった。

またこの頃になると、自活の為の知識も豊富になってきており、計画を立てて実行して行けば、今後何年間この島で生きてゆかねばならないか判らないが、かなりの長期間でも何とかできるのでないかという楽観的な気持ちになりかかっていた。

しかし、日がたつにつれて、それがどれだけ困難であるかを思い知らされることになる。

ショートランド島は小島であり、食料源に限界があり、僅かな食料を得る為に大きな労力が必要であった。そして兵員が元氣なうちは未だ良かったが、マラリヤ等の病に倒れ、体力が衰えてくるにしたがって、どうにもならない飢餓状態に陥ってくるのであった。

多くの兵がこの地で飢えのために命を落とし、再び故国に帰ることが出来なかった。しかも飢えて死ぬと言うことは、死に方のなかでも極めて悲惨であり、残忍でもあった。

その頃の大隊本部は次のような構成であつた。

(将校) 計六名 (下士官) 計五名

大隊長 一名 (少佐) 事務係 一名 (曹長)

大隊副官 一名 (中西中尉) 被服係 一名 (村岡軍曹)

兵科将校 二名 (原田少尉) 兵器係 一名 (木田伍長)

軍医将校 一名 (小林少尉) 指揮班 二名 (福島軍曹)

經理将校 一名 (山本少尉) (青木伍長)

(兵) 計三十四名

将校当番兵 五名 大隊長付 将校炊事 中西中尉付 原田少尉付 小林少尉付

通信兵 三名 (山田上等兵・笠谷上等兵・杉本一等兵)

衛生兵 三名 (結城上等兵・植木上等兵・木村一等兵)

炊事班 三名 (橋兵長以下)

指揮班 二十名 (舟木兵長以下)

猶、西南台の宿舍配置は次の通りである。西南台頂上から四十メートル下の谷川迄の山腹に以下

の順序で建てられている。

大隊長宿舍 (西南台の一番頂上)

将校宿舍 (大隊長宿舍より五メートル下る)

通信室 (将校宿舍の横)

将校当番兵舎兼将校炊事場（将校宿舎の横）

下士官宿舎兼事務室（将校宿舎より五メートル下る）

兵舎二棟（下士官宿舎より十五メートル下る）

監視所（兵舎二棟の中央にある巨木の頂上―西南台密林上）

炊事場（兵舎より十五メートル下る―川辺）

風呂場三棟（炊事場の横―川辺）

医努室（炊事場より五十メートル横―川辺から若干離れる）

病舎（医努室隣接―川辺から若干離れる）

とにかくも、戦線が後方に遠去かり、十九年に入ってから銃声を聞くことの無い平穏な日々が続いた。

自活の為の食物収集のみが日課である。

雨が酷く降り収集に出られぬ日、兵達は故郷の思い出話を飽きもせず語り続け、そして家族の顔を思い浮かべて軍事郵便葉書に便りを書く。軍事郵便が内地に届かぬようになってから既に久しいが、何の慰めをも持たぬ兵達に告げることは出来なかった。

葉書は集められて、検閲の為に将校の許へ持つて来る。その関係で、通信兵の笠谷上等兵が妻宛に書いた葉書を読んで、その内容があまりにショックだったので今でも記憶している。

「――俺は元気だ。何時でもお前がどんな暮らしをしているか気になっているが、幸せを祈っている。ところで、生活に追われて頭が空っぽにならないように毎月（婦人公論）を読むようにして呉れ。何時の日か俺が帰還したら、又充実した生活を始めよう。――」
「大体そんな概要だった。」

日々、野生の獣のように、黙々と食物漁りに出ているが、心の中では、残してきた家族の事を

一刻として忘れることが出来ずに、その生き様にまで真剣に心配しているのがありありと判ってあわれであった。しかもその葉書、その愛情が妻に届く事はもう絶対に無い。さらに後日の事であるが、彼自身、多くの戦友と同じように飢えと病の為ジャングルの中に埋葬されることになるのである。

西南台の生活は平穩ではあるが、娯楽、慰安は全く無い。勿論酒も無かったし酒を作る方法も知らなかった。椰子の実から簡単に酒が作れるのであるが、戦前ショートランドを統治していた英国が、治安の為酒の醸造を厳禁していたので、土民も醸造法を知らないし、我々も教えられないことは無かった。

これだけ楽しみが無いと、普通なら兵の気性も荒れてきて、色々と厄介な事件を起こし勝ちである筈だが、食の方に全力投入しているので、そんな余力も無いようであった。

只大隊長だけは為す事も無く、いらいらした気分になるようであり、一日中私を相手にして碁をうっていた。常に機嫌が悪く、人を見るたびに叱りとばしている。一番被害が大きかったのは大隊長の身近で世話をしている将校当番兵達であった。

日本内地で部隊編成以来、大隊長付の当番兵として身の廻り一切の世話をしてきた魚住兵長と大阪で板前をしていた関係から将校炊事を担当している井田上等兵は、大隊長の機嫌を損なわないように、毎食の食事には特に気を使っていた。時にはマラリヤのため高熱を出していても川に飛び込んで小魚を取ってくる事もあった。自分達は食う物も食わずにそんな努力している二人に對して「こんな物が食えるか！」と怒鳴っている所をしばしば目撃したものである。

大隊長以外の者は、既に生きてゆく為に必要な最低の食事さえ得られない状況になりつつある事を、大隊長自身もよく知っている筈である。いらいらが嵩じて食事以外の些細な事に就いても魚住兵長を怒鳴りつける。こうなってはもう病氣と思わざるをえない。大隊長はもともと左右の目の大きさが極端に違っていて不気味であるが、それが怒鳴っている最近の人相を見ていると、

私は、ひょっとすると大隊長は狂ってきたのではないかと考える事がよくあった。

悪い事が重なってしまった。

魚住兵長が他の将校当番兵達に大隊長の噂をしていたところ、耳聰い大隊長がたまたまそれを聞いてしまったのである。

将校当番兵の交替が行われた。

「関西の兵隊は狡くて安心出来ん」大隊長はそう言って魚住兵長の代わりに来（らい）一等兵と言う九州出身の兵を大隊長付当番とした。

私の当番兵藤本一等兵も森本二等兵に交替させられた。

旧当番兵は二人共指揮班に配置されたが、ショートランド島に来てから病氣勝ちで体力の弱っている魚住兵長が指揮班業務に耐え得られるか心配だった。

将校当番兵以外にも若干の配置替えが行われ、同時に十八年十二月一日付の進級発令の通知があった。

私は見習士官から陸軍少尉に任官し、私の当番兵も一等兵に進級した。私は任官しても特に嬉しいと思わなかったが、当番兵はそうではなかった。

その日の夕方、ドラム罐の風呂が沸いたことを森本一等兵が知らせてきた。私は禪一つになり谷川のそばにある風呂場へ行くと、森本一等兵が待ちうけていた。

「小林少尉殿、背中を流させて下さい」当番兵に背中を流して貰った事はかって無い。ふと顔を見ると彼は涙をためていた。彼は進級の喜びを身体で現したかったのである。無理も無いことである。軍隊と言う厳しい階級社会の中で、星一つの最下位の階級から初めて進級したのである。そして二十一才の若さで、生きるか死ぬか判らぬ戦地にあって感激するような事は何一つ無い。そんな環境での進級が、殊の他嬉しかったに違いない。

「おめでとう、良かったな。」恐らく彼にとって、従軍中一番嬉しかった日になるだろう。

その夜、大隊長は又私に碁の相手を命じた。碁をうっている時だけは大隊長も静かである。

「大隊長殿、今日森本一等兵が進級させて戴いて、泣いて喜んでいました。」

「——」返事も無く、碁盤を見つめている。その時、通信兵の山田上等兵が報告に来た。

「連隊本部から連絡がありましたので報告します。ブーゲンビル島で転属した松本第二中隊長はタロキナ攻撃で重傷を負い入院していましたが、片足を切断して退院したそうです。」

「——」表情も変えずに碁石を並べている。

この日程大隊長を憎いと思ったことは無い。

この非情な大隊長、あの純情な森本一等兵。

この二人が祖国への任務を果たして戦死する時の死に顔も違うだろうな、と死に顔の想像をしたりもした。